

# 観音信仰にみる近世的感受性

## その中国における物語の分析

京都学園大学 川田耕

### 目的

東アジアにおける自生的な近代性を理解するうえで、東アジア各地に広がるとともに明代の中国で大きく変貌し発展した観世音菩薩への信仰は歴史社会的にも精神的にも重要である。なぜなら、それは、近世以降の東アジアにおいて最も広く民衆に信仰された神仏であり、今日も信仰を集める様々な女神の母型となったからである。本発表では、近世中国における観音の物語を分析することによって、民衆における近世的・近代的な感受性のありようを、集権化し文明化していく社会的な大状況と重ね合わせながら、理解しようとするものである。

### 方法

観音信仰は早くから中国とその周辺に広がり受け継がれてきたが、宋代に観音信仰の拠点であった香山で「妙善伝説」が生まれ、明代に舟山列島の普陀山における信仰が盛んになる辺りから、質的にも量的にも大きく発展する。この広域的な信仰は、教義・教団・伝播地域・信徒の属性など様々な角度から研究されるべきものであるが、本発表では、香山周辺で生まれその後宝巻などで語り継がれてきた観音の由縁を説いた妙善伝説を分析することを主たる手段として、観音信仰のなかに現れた近世的・近代的な感受性を明らかにするものである。なお、妙善伝説とは、王の三人の娘のうちの末娘である妙善が、後世を思い父母の恩に報いるために父王の命に反して出家し、王に殺されながらも、自らの目と手を献じることで王の命を救い、千手千眼の観音菩薩であったことが明らかになった、といったプロットからなる。

### 結果

妙善伝説は、古い経典を利用し妙善を親孝行の至極とすることで、同時代の集権的・家父長制的な国家秩序とそれともなう超自我的な倫理性とを表面的にはなぞっている。しかしながら、物語は、妙善の隠し持つ「死神性」を、娘の殺害や王の死病といった、残虐で不穏な嗜好によって表現している。そのうえで、父王に背いて王に殺されかけた妙善がその目と手を自ら抉り取って父に捧げることで父の命を救ったことは強者に道徳的に復讐するルサンチマン的なドラマと理解できる。同時に、この扱われた復讐劇は、王と王以外、親と子、男と女、既婚と未婚といった社会的な権力のコードを全面的に逆転させる秩序転覆志向をとまなっている。同時代の他の物語などと重ね合わせて分析すると、こうしたルサンチマン性と秩序転覆的志向は、集権的国家秩序を内破していく意義をもっていると考えられる。かくして、死神的な破壊性をもって秩序を転覆したうえで、妙善は偉大な聖なる菩薩として崇められることになるのだが、そのさい、その元来の破壊性は願望充足的に反転されて、妙善はすべての人に世俗的救済をもたらす、処女にして万人の母である、愛の女神に変異した。このような神の出現は、逆に、母性的な愛情への期待をもたらす強化する作用があって、明代以降の様々な女神信仰の先駆となった。

### 結論

近世中国における観音の「女性化」は夙に知られるが、その内実は初めての本格的な母親的な神の出現であった。しかし、その出現のためには、国家的・家父長制的体制へのルサンチマン的な復讐と価値の転倒が必要だったのであり、そうした転覆的な物語をへてはじめて、万能で美しく愛に満ちた母神への期待という幻想的な感受性が生み出されたのであって、それはすぐれて早期近代的な現象と考えられる。